

東北方言における原因・理由表現形式の分布

竹田 晃子

1. 目的

本稿は、東北方言における原因・理由表現形式について、1940(昭和15)年頃の分布を地図化し、小林好日(1944, 1950)の記述と、1980(昭和55)年頃の調査による『方言文法全国地図』と比較し、考察することを目的とする。

それに伴い、小林好日氏による「東北方言通信調査資料」から、原因・理由表現に関わる調査項目「澤山あるからやろう」と「それ故に（それだから）」の2項目を地図化する。小林好日氏の資料については、上記2項目に基づく記述が小林好日(1944)『東北の方言』、同(1950)『方言語彙学的研究』にあり、後者の巻末には地域名×語形のクロス表の一部が収録されている(図3参照)。また、国立国語研究所(1989)『方言文法全国地図』第1集における第33図「(雨が)降っているから」、第35図「だから」、第37図「子どもなので」の3項目の略地図を作成し、特に第33図・第37図の東北地方の分布をとりあげる。『方言文法全国地図』については小林賢次(1996)、彦坂佳宣(2005, 2006)などがある。これらと照らし合わせしながら、東北方言における原因・理由表現形式の分布を考察する。

2. 資料の概要と地図化

『方言文法全国地図』の調査概要は国立国語研究所(1989)『方言文法全国地図解説1 付資料一覧』に詳細があるので省略し、ここでは「東北方言通信調査資料」の概要と地図化の方法について述べる。

2.1 資料の概要

「東北方言通信調査資料」は、故小林好日氏が1940(昭和15)年頃に行った通信調査の調査票とそれを集計した統計表で、現在は東北大学文学部国語学研究室に保管されている。詳細は竹田晃子(2003)、東北大学方言研究センター「昭和初期東北方言調査資料のデータベース化」(http://www.sal.tohoku.ac.jp/hougen/k_database.html, 2007年2月1日現在)を参照されたい。以下、(1)～(11)にその概要をまとめた。

- (1) 調査者：小林好日（こばやし よしはる。当時 東北帝国大学教授）
- (2) 調査の目的：東北地方における伝統的方言の分布把握

- (3) 調査の方法：調査票を小学校などの依頼先に配布し、調査を依頼、記入後に回収
- (4) 調査時期：調査票の締め切りは、第1回1938(昭和13)年10月31日、第2回1939(昭和14)年10月31日、第3回1941(昭和16)年6月30日であることから、調査時期はこれらの直前の1～2ヶ月ほどと考えられる。
- (5) 調査票：3種類
- (6) 調査項目：標語数は、第1回97、第2回67、第3回100、合計267
- (7) 調査票の総数：約7500部
- (8) 地点数：地名の異なり数は、Ⅰが約1100、Ⅱ・Ⅲが約1300、全体で約2000地点。
- (9) 依頼先：東北各地の尋常小学校(国民学校)、師範学校などの教育機関。
- (10) 調査者と回答者：各学校の教員と師範学校の学生で、生年が明治15年前後～大正末(当時60代～10代後半)の幅広い年齢層。事実上の回答者を兼ねた場合があると思われる。
- (11) 記入方法と態度：表紙には方言語形をカタカナで発音通り記入するよう指示があり、記入内容から大半がそれに従ったと考えられる。おおむね協力的で、通信調査としては回収率が高いと推定される。

調査時期・地点密度について、『日本言語地図』『方言文法全国地図』と比較すると表1のようになる。「東北方言通信調査資料」の地点密度は国土地理院などから当時のおよその人口と面積を得て値を算出した。調査地点数の算出方法については2.2で触れる。通信調査ではあるが、地点数・地点密度では『日本言語地図』『方言文法全国地図』を大きく上回る規模で行われたことがわかる。

		「東北方言通信調査資料」	『日本言語地図』	『方言文法全国地図』
調査時期		1938～1941年 (昭和13～16年)	1955～1964年 (昭和30～39年)	1979～1982年 (昭和54～57年)
東北地方	調査地点数 全体[県平均]	約2000 [約321.3]	431 [71.3]	149 [24.8]
	人口地点密度	28	4.7	1.7
	面積地点密度	33	6.6	2.3

表1 調査時期・地点密度の比較

2.2 地図化の準備

「東北方言通信調査資料」の地図化にあたり、国立国語研究所の調査地点番号システムによる地点番号の決定、回答データの入力・整理を行った。これらの作業には、竹田晃子によるもの(1994～2005年)と、科研費(2000～2003年度特別研究員奨励費)のアルバイトによるものが混在する。

以下、作業の概略を述べておく。調査票への地点番号の付与に先だって、当時の地名と現代の地名の同定を行った。調査票表紙に記入されている全ての調査地名（県名・郡名・市町村名・稀にそれ以下の住所）を根拠とし、地名辞典（『角川日本地名大辞典』第2～7巻、他）における1940（昭和15）年頃前後を含む市町村の廃止・設置・分割・合併に関する情報を照合した上で、原則的に調査地名と同地名を調査地点の地名とした。同地名がない場合、小学校（尋常高等小学校・尋常小学校、国民学校など）の所在地が把握できるものはその地名（学校がない場合は当時の役場の所在地）をもって調査地点住所とした。その後、2000年前後の各県白地図に地点番号枠を配置し、調査地点住所から地点番号を算出した。調査票に地名記載のない数十冊を除き、地点番号は延べ約7000地点、異なり2000地点強にのぼり、異なり数が調査地点数に相当する。

回答のデータは、調査票ごとに回答欄の内容を記載通りに入力した。また、1地点と認められる地点に複数の調査票があるなどして、結果的に1地点の回答が複数の種類になる場合、併用回答として処理した。

地図作成には、Adobe-Illustrator9.0.2と、国立国語研究所が公開しているプログラムおよび『方言文法全国地図』第1集データを利用した(<http://www2.kokken.go.jp/henka1/>, 2007年1月15日現在)。

3. 調査項目

3.1 「東北方言通信調査資料」の調査項目と回答

本稿で地図化するのには、「東北方言通信調査資料」における2項目の下線部の回答である。

- (1) 「澤山あるからやらう」 (1941(昭和16)年調査)
- (2) 「それ故に (それだから)」 (1939(昭和14)年調査)

実際の調査票には、(1)は「標語」欄に「それ故に (それだから)」、参考方言例」欄に「ソレダハデ、ソレダハンテ」と印刷されており、調査者は、その下の「方言記入欄」に回答を自由記述することになる。(2)は、頁の最初に「次の文を方言でかいて下さい」、参考方言例」欄に「澤山あるからやらう」とあり、調査者は、その下の空欄に回答を自由記述することになる。なお、(2)には「参考方言例」欄はない。

(1)の用法は、主節に話者の意志的な行為「やらう」が述べられ、その理由として従属節で「澤山ある」と述べられている。共通語の「から」「ので」における「行為の理由」の用法にあたるといえよう（前田直子・日高水穂・小西いずみ・船木礼子(2006), p. 235)。

一方、(2)は、(1)などのような文脈がなく、「それ故に」または「それだから」の方言形を求めていることから、共通語の接続詞「だから」に相当すると考えられる。

実際の回答例をいくつか挙げておく。

- (1) ウントアルシテケルア、イッペアルハデケラー、ズッパリアルヘンデケルア、エ

ツァエアルアヘンテケルア，エツペアルンダシケルア，イッパエエアツケエーニ
ケンガ，イッペエアツカラヤリスぺ，一パイアツカラヤツペチャ，イッペアルンテ
ガニヤル，イッピアーアロガラケロ，ヨゲアルエンテケル，エツペアツサゲクレ
ル，エツペアツハゲヤル，タントアツゴントラケル，たんとあつこつたらくれっぺ
い，ウントアツカラクレル，など

- (2) シタハデ，ソレダハデ，ソダハンテ，ソنداハンデ，ンダーセーデ，シタエンテ，
ソレダンテ，ンダンテ，ソنداサカイニ，ホダサカエ，ソダサゲ，ソンドスケエー，
ソンダァーシケエー，ヘダシケア，ソンドスケ，ンダハゲエア，ソダハケ，ンダハ
ゲ，ソナダシ，ソイダシテ，ンダガラシテ，ンダタエニ，シタシテカニ，ンダガネ，
ソレダツケエ，ホンダツカエー，ソنداガラ，ソレダカラ，ホンダガラ，ホダカ，
ソンヂャガラ，ソンジャカ，シタガー，ホダモンダカラ，ウダモンダカラ，など

地図化にあたり，出自がわからないものや孤例など，分類が難しい語形は省略した。

回答の延べ語数，異なり語数は次の通りである。(1)のほうが(2)より少ないのは，(1)
の上接語の存在動詞「ある」には語形の地理的変異が少ないことによると考えられる。

	調査年	標語	延べ語数 (下線部)	異なり語数 (下線部)
(1)	1941(昭和16)年	澤山 <u>あるから</u> やらう	2935	289
(2)	1939(昭和14)年	<u>それ故に</u> (それだから)	3411	426

表2 該当部分の語形数

3.2 『方言文法全国地図』の回答

『方言文法全国地図』第1集から，次の4枚の略地図を作成し，本稿の末尾に添えた。

(1)は小西いずみ氏作成の略地図を，了承を得て竹田が加工したものである。

- (1) 「(雨が) 降っているから (行くのはやめろ)」(第33図)
- (2) 「子どもなので (わからなかった)」(第37図)
- (3) 「だから (言ったじゃないか)」(第35図)
- (4) 第33図・第35図・第37図における同語形

語形分類は，「から」「ので」にあたる部分を取り出して行った。(1)では動詞と時間表現
形式までを取り除き，(2)では「子ども」と指定辞相当の形式までを取り除き，(3)では指
定辞相当の形式を取り除いたものを分類し，地図化した。しかし，例えば(2)では指定辞相
当の形式がなく，「子ども」を表す語にそのまま「ので」相当の形式が付いている場合や，
(3)では指定辞から「から」相当の部分を切り出すことができない場合などがある。上接語

との関係を考慮した地図化ならびに全国分布の考察は今後の課題である。

(4)は、これら3種類の図で同じ語形が使われた地点のみを地図化したものである。「から」「ので」、接続助詞・接続詞の違いについて、形式による使い分けがない地点ということになる。

(1)(3)については、「東北方言通信調査資料」と同じ記号に置き換えた地図を別に作成し、うち東日本部分を図1・図2の右側に掲載した。

4. 分布

分布図(図1, 図2)について、図1を例に説明しておく。

図1では、主要勢力のホドニ類を菱形、サカイニ類を三角形、カラ類を小さい丸形で表した(紙媒体の報告書はモノクロだが、web版ではホドニ類を赤、サカイニ類を青、カラ類や、サカイニ類のうち原形に近いサカイニ・シカイニ・スカイニなどを含むその他の語形を黒で分けてある)。

頁の左側に図1-①として「東北方言通信調査資料」の地図、右上には図1-②として『方言文法全国地図』の東日本部分を示し、右下には双方の凡例をまとめて示した。「東北方言通信調査資料」は地点が混み合っているため、特に青森県上北・三戸地方、秋田県南部、山形県中北部において記号が重ならないよう整えた。なお、図1-①と同記号で地図化したため、末尾に示した全国分布の略図とは語形分類と記号が異なる。

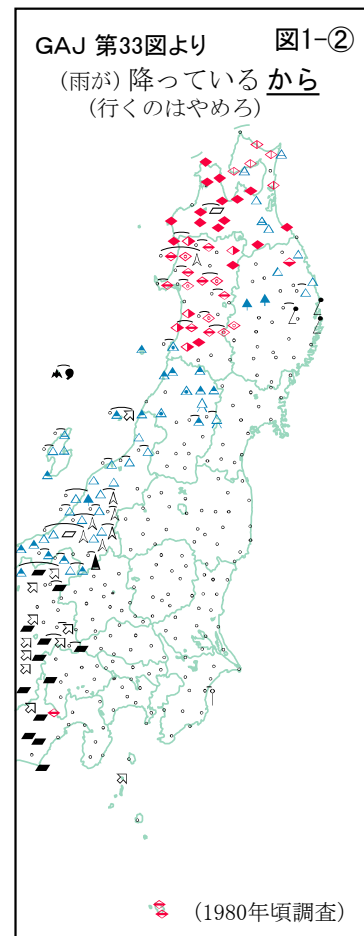
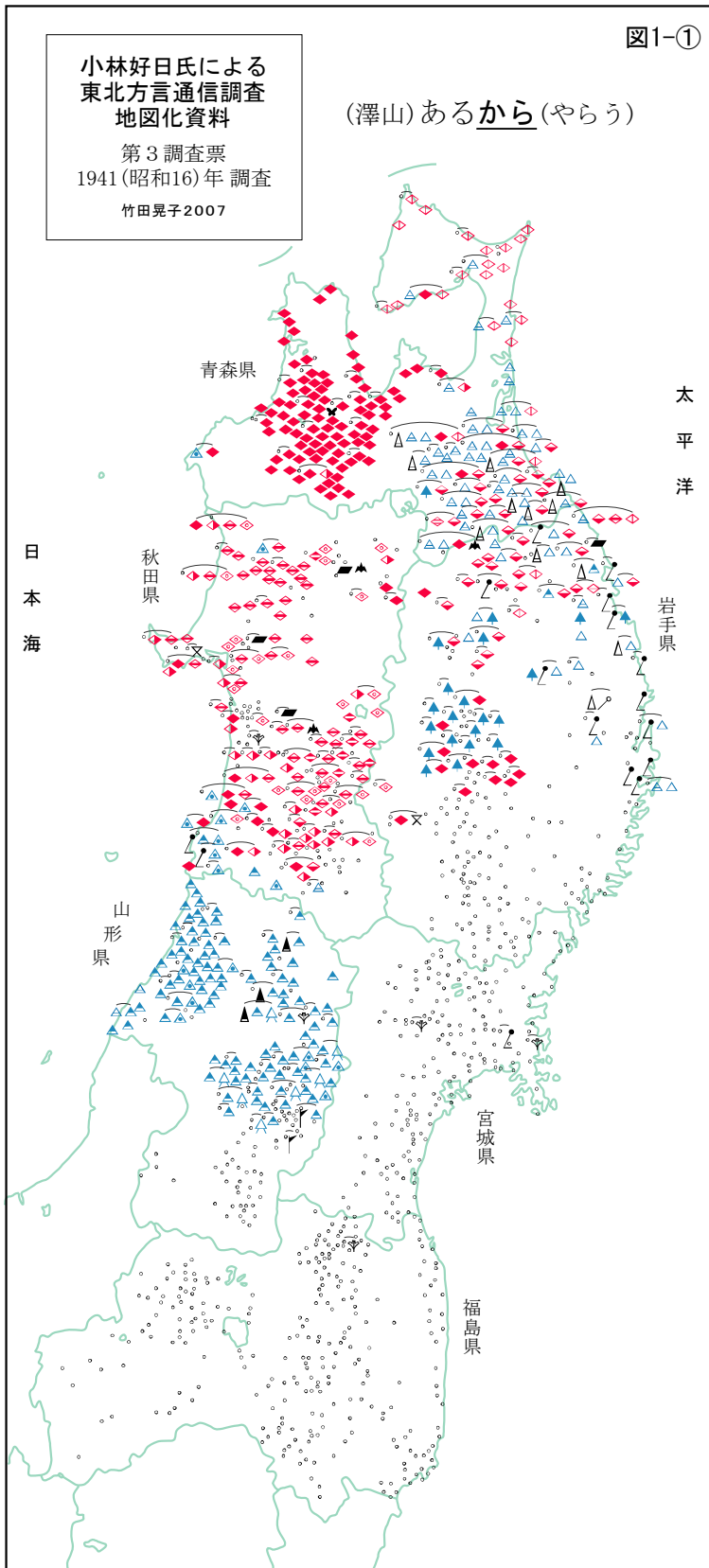
4.1 句末用法(用言+接続助詞)

4.1.1 「あるから」(図1-①「東北方言通信調査資料」)

図1-①「あるから」を概観すると、大きく2点の特徴があげられる。ホドニ類の菱形がサカイニ類の三角に囲まれるように分布する点と、カラ類の小さい丸形専用地域が旧伊達藩地域である岩手県中部より南に広く分布する点である。図2-①「それ故に(それだから)」の分布もほぼ同様であるため、ここでは図1-①と図2-①に共通する点をまとめ、相違点を4.2.1で述べる。

最も広く分布するのは菱形のホドニ類で、北東北の3県に分布している。元の語形とみられるホドニが1地点、青森県三戸郡斗川村(現在の三戸町内)にある。青森県津軽地方、秋田県北部・由利地方、岩手県内陸中央部にまとまったハデ・ハンデがある。それらの分布域の間に、青森県から岩手県の旧南部藩地域にエンテ、セーデ・セデ、秋田県にンテ(ニ)・ンデ、エンテガ・ハテガ(ニ)・ンテガ(ニ)、秋田県中南部にヘデ・ヘーデ、エンテガラ・(ン)テガラなどが分布している。セーデ・セデの扱いについては4.3で述べる。

サカイニ類は日本海側と太平洋側に分かれて分布があり、それぞれ語形が異なる。4.3



- カラ
- ◡ カリ・カイ
- ◡ カラニ・カラニ
- ◡ ケアー(ニ)・キヤーニ・カイニ
- ◡ カラシテ・カラッテ
- ケニ・ケン
- ▲ サカイ(ニ)
- ▲ シカイ(ニ)・シカエ
- ▲ スカイ(ニ)
- ▲ サケ(ア)・サエ
- ▲ シカ(ア)・シキ(ア)・シケ(ア)
- ▲ スカ(ア)・スケ(ア)・スケイ
- ▲ ハゲ(ア)・ハゲアン
- ▲ サケデ・シケデ・ハゲテ・ゲテ
- ▲ (ダ)シ・(ダ)ス
- ◇ ホドニ
- ◇ ハデ・ハンテ
- ◇ アンテ・エンテ・エデ
- ◇ ヘデ・ヘーデ・ヘンテ
- ◇ セーデ・セテ
- ◇ ンテ(ニ)・ンデ
- ◇ エンテガ・ハテガ(ニ)・(ン)テガ(ニ)
- ◇ エンテガラ・(ン)テガラ
- ◇ シテ(ネ)・ステ
- テ・デ
- ノデ
- ★ モノ・オノ
- ◡ ニ
- ✖ バ
- × タメ(ニ)・タイニ
- ♣ コツタラ
- ▲ ンガ

図1 ①「あるから」、②「降っているから」

で後述するが、この語形の違いは小林好日(1950)の巻末の表(図3)においても指摘されている。1つはサケアで、日本海側の山形県中北部から秋田県本庄由利地方にかけて分布している。もう一方はシケア・スケアなどで、太平洋側の青森県・岩手県にまたがる旧南部藩地域に分布している。これらの元の形とみられるサカイニの3地点が山形県内陸(北村山郡亀井田村:現在の大石田町内、最上郡大蔵村・金山町)、サカイニに近い形のシカイニ・スカイニの12地点が青森県上北・三戸地方から岩手県北部にあるが、これらはいずれもサケア、シケア・スケアの分布域の中に点在している。

ホドニ類とサカイニ類の2大分布勢力がぶつかる地域は2カ所ある。双方の地域で異なる混淆形が生じていると考えられる。1つは日本海側南部の山形県中北部のサカイニ類と秋田県南部のホドニ類の衝突によって生じたとみられるハゲア・ハゲアンで、サカイニ類とホドニ類の境界の本庄由利地方にある。このハゲアについて、小林好日(1944, 1950)は「古いハデと新しく傳つたサカエとの^{コンタミネイト}混淆したもの(小林好日(1950), pp. 230-321)」と考察しているが、小林賢次(1996)には、「『エンテ』『エツテ』などの語形と合わせて、なお考えるべきものであろう。(p. 369)」とある。

もう一方の衝突地帯である太平洋側北部では、日本海側ほどの明瞭さで双方の語形分布がぶつかっているわけではない。青森県上北・三戸地方から岩手県北部の一带に、サカイニ類のシカア・スカアとホドニ類のセーデが半ば混じり合って分布しているというものである。その混じり合った分布域を挟むように、青森県津軽地方と岩手県内陸中央部にハンデ・ハデの分布地帯が広がっている。

この衝突地帯から下北半島にかけて、ホドニ類とサカイニ類の混在を逃れるようにして、シテ・ステが分布している。これは、サカイニ類(シカア・スカア)とホドニ類(ハデ・セーデ)の混淆形と考えることができる。日本海側の混淆形ハゲがハデとサゲでホドニ類+サカイニ類の順であったのに対し、太平洋側の混淆形はシカア・スカアとハデ・セーデのように逆のサカイニ類+ホドニ類の順である点、興味深い。なお、このシテ・ステ類の分布は、図1-①「あるから」よりも図2-①「それ故に(それだから)」のほうがやや狭い。

このシテ・ステについては、シテカラニ・ステカラニからの変化と考えることもできそうだが、図1-①・図2-①でそれに近い語形としては、秋田県山本郡能代町(現在の能代市市内)にシテカニ、やや近い語形として青森県上北郡七戸村(現在の七戸町内)にシテネがあるのみで、他に近似語形が分布したとみられる痕跡はない。また、青森県三戸郡戸来町(現在の新郷町内)にガラシテ、秋田県雄勝郡弁天村(現在の湯沢市内)ガラシテ、ガラシテ、山形県山形市・東村山郡金井村(いずれも現在の山形市)があり、ガラテが山形県村山地方・置賜地方で回答されている。したがって、シテ・ステをシテカラニ・ステカラニからの変化による語形とすることは難しいと考える。

サカイニ類の三角記号の太平洋側における南限は岩手県内陸中央部だが、その語形は(ダ)シ・(ダ)スで、小林好日(1950)には「岩手縣にはなほ之と並んで ソダダス ソダ

ダシ と云ふのが盛岡市や岩手縣紫波郡等に在る。ウント、アルダス、ケル（澤山あるからやらう）などと云ふ。サカエ、スカエの如きものが甚だしく破壊した形と解釋することが出来る。(p. 227)」とあり、サカイニ類の語形とされている。(ダ)シ・(ダ)スのようにシ・スがそろっており、この地域の北側にはシケア・スケアがあることから、これらの語形のケア部分が脱落したものとも考えられる。

なお、図 1-①には「アルンダス」などや、図 2-①「それ故に（それだから）」には「ソンダンダス」などのようにンダスなどの形も回答されている。この形式は、現在の盛岡市の高年層では、「毎日行グンダス（行くから）、そんなことは知っているよ」、「虫の巣を見つけたので、始末しようとした」、「具合が悪くて起ギラレネダス（起きられないから）、水を持ってきてくれ」、「黙っているときは機嫌のいいときナンダス（いいときなんだから）、話しかけたくても我慢する」などのように用いられる（竹田の調査による）。これに関連して前田直子他(2006)には、「し」「のだし」などについて次のようにある。

「し」が、話し手の想定する統括命題を導くために、話し手が根拠とみなすものを列挙する意味を持つならば、後件にはほかでもない話し手がそう考えているのだということを表す内容が出現しやすいと思われる。(中略)前件に理由、後件に意志性のある事態が述べられる場合は、後件の意志の行為を行う／行った理由は、行為者である人物が最もよくわかっているからである。また同様の理由から、一人称主語の事態のほうが、三人称主語の事態よりも後件に出現しやすいであろう。

なお、標準語の「～のだから」と同様に、後件に聞き手への行為指示や話し手の意志・希望などが現れる場合、「のだし」と固定化して使われる可能性もある。(p. 241)

この記述と照らし合わせると、(ン)ダスの用法は共通語の「(の)だし」に近く、それに相当する形式とも考えられる。この(ン)ダスの由来がサカイニ類あるいは「(の)だし」のどちらであるかについては現時点では情報が不足しており、今後の課題である。

カラ類については、岩手県・宮城県の旧伊達藩地域、福島県、山形県置賜地方にはカラ・ガラが強く分布している。岩手県中北部の沿岸にケアニ・キャニがあるが、カラ類にニが付いたものと考えられる。元の形と見られるカラニは1地点、岩手県下閉伊郡崎山村（現在の宮古市内）で回答されている。また、カラシテ、カラッテが山形県村山地方の南端に1地点ずつある。

カラ類が、サカイニ類やホドニ類に付いたとみられる語形もある。山形県内陸にはサケデ・ゲテなどが点在しており、サカイニ類にデの付いた語形と考えられる。ハゲテも存在する。また、平鹿地方などのエンテガラ、エンテガの分布域はホドニ類の分布の中央部で、秋田市・湯沢市などその周辺部にはカラ類専用地域もあることから、ホドニ類にカラが付いてできた語形と考えられる。

その他、バが1地点あるが、これは青森県南津軽郡大杉村（現在の青森市内）に「ウツテアルバケラァ」のように回答されたものである。岩手県紫波郡徳田村（現在の矢巾町内）に「エツペアアラバーツケロ」と回答されたもので、後者は調査票の隣の項目「(標語) 澤山あるなら1つ呉れろ」が誤って回答されたとみられるため、地図では省略した。また、モノ・オノがホドニ類の中に3地点、タメニが男鹿半島と岩手県内陸の2地点にある。

4.1.2 「降っているから」(図1-②『方言文法全国地図』第33図)

図1-①と比べると、全体にほぼ同様の分布であるが、ホドニ類では岩手県内のハデ・ハンテが消滅している。サカイニ類ではサカイニ・シカイニ・スカイニが消滅、青森県上北・三戸地方から岩手県北部に分布していたシカァ・スカァなどが減少している。

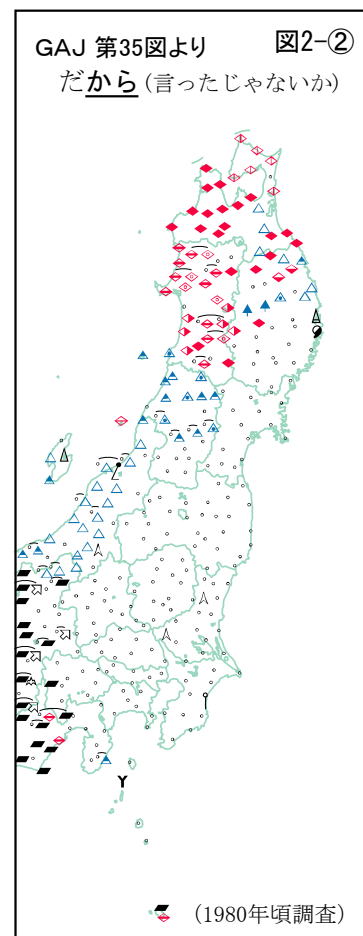
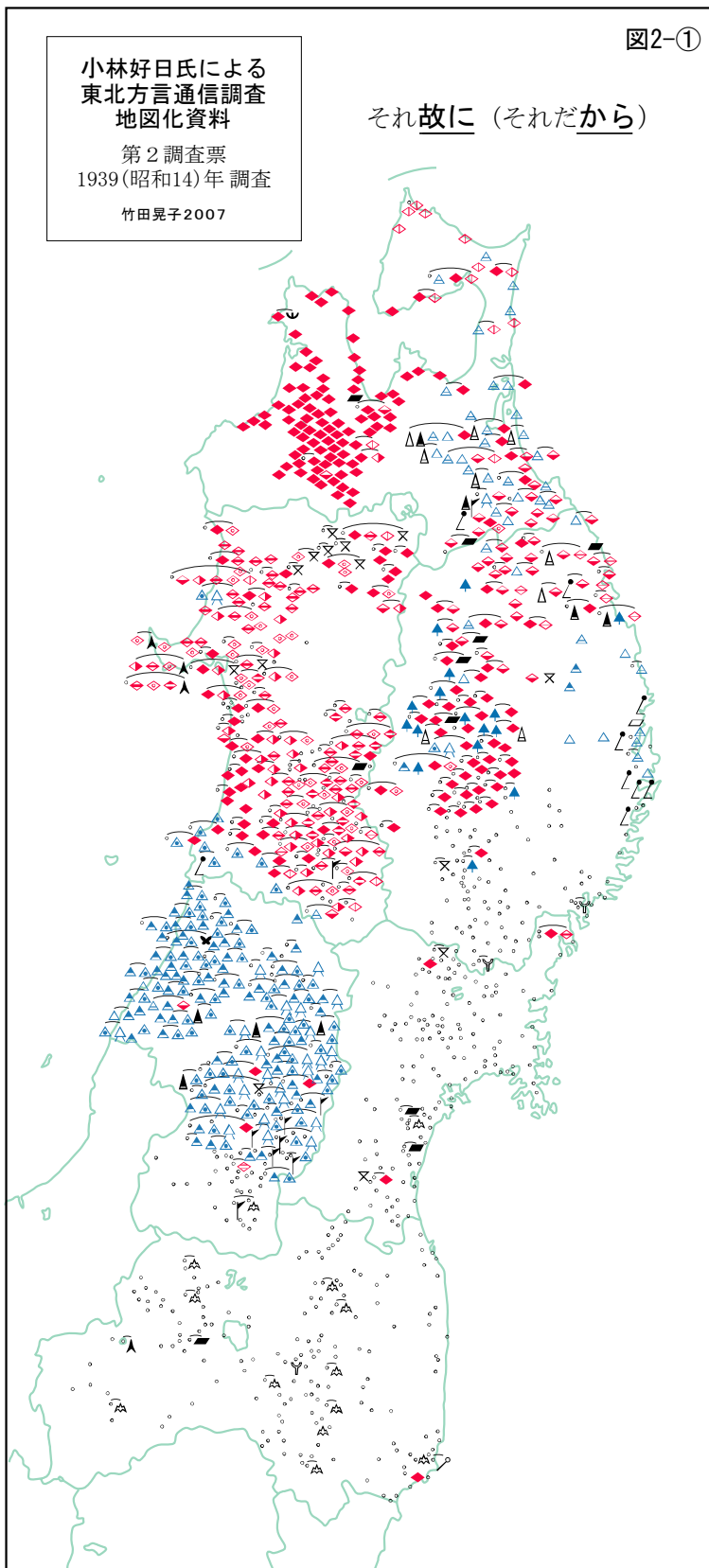
岩手県二戸市福岡字鍵取（地点番号372532）では、hutteraaが回答されており、彦坂佳宣(2005, 2006)ではバ相当の形式として記号化されている。しかし、当該の地方では動詞連用形にテダまたはテラが付いた形で共通語の「～ていた」「～ている」相当の意味を表す場合があり、この場合は「雨が降っているから、行くのはやめろ」のような複文ではなく、「雨が降っている。行くのはやめろ」のように単文の連続が回答された可能性を否定できないと考え、図1-②及び全国地図では記号化しなかった。今後、検討する必要がある。

第35図「子どもなので」では、青森県津軽地方の2地点でドゴデが回答されているが、「東北方言通信調査資料」および第33図・第37図には回答されていない。これはトコロデに由来する形式と考えられる。津軽地方（主に青森市）の中年層からは、「正月がくるドゴデ（くるから）、大掃除をした（動詞）」、「気動車だトコロデ（気動車だから）、修理には時間がかかる（名詞述語）」、「お父さんに頼んでおいたドゴデ（頼んでおいたから）（文末用法）」、「うちには車がないドゴデ（ないから）、隣の人にらせてもらって行った（形容詞）」、のような用法の他、「子どもが起きてこないモンダドゴデ（起きてこないものだから）部屋に行ってみた」のようにモンダドゴデの形で用いられる場合がある。また、「自動ドアを手動に切り替えても閉じた時に引っかかる。ンダドゴデ（それだから）、後できちんと修理してくれ」のように接続詞でも使用され、(ソ) シタドゴデ、ソイダドゴデ、(ン) ダドゴデなどもある（以上、竹田の調査による）。しかし、「東北方言通信調査資料」にはこれらは一切回答されておらず、のちに使用されるようになった可能性がある。

4.2 接続助詞

4.2.1 「それ故に（それだから）」(図2-①「東北方言通信調査資料」)

図2-①については、「それ」という語が含まれていることから『方言文法全国地図』の「だから（言ったじゃないか）」(図2-②)と単純に比較できない点は否めない。しかし、図2-①の調査項目は「それ故に、それだから」の方言形式を文脈なしに単独でたずねており、接続詞相当の形式を求めた項目と考えてよいだろう。そこで、2つを図2にまとめた。



- カラ
- ∩ カリ・カイ
- ∩ カラニ・カラニ
- ∩ ケアー(ニ)・キヤーニ
- ∩ カラシテ・カラッテ・ガラテ
- ∩ ケー・ケ
- ▲ サカイ(ニ)
- ▲ シカイ(ニ)・シケアニ・シカエ
- ▲ スカイ(ニ)・スケアニ
- ▲ サケ(ア)・サエ
- ▲ シカ(ア)・シキ(ア)・シキヤ・シケ(ア)
- ▲ スカ(ア)・スケ(ア)・スケイ
- ▲ ハゲ(ア)・ハゲアン
- ▲ サケデ・シケデ・ハゲテ・ゲテ
- ▲ (ダ)シ・(ダ)ス
- ◇ ホデ
- ◇ ハデ・ハンテ
- ◇ アンテ・エンテ・エデ
- ◇ ヘデ・ヘーデ・ヘンテ
- ◇ セーデ・セテ
- ◇ ンテ(ニ)・ンデ
- ◇ エンテガ・ハテガ(ニ)・(ン)テガ(ニ)
- ◇ エンテガラ・(ン)テガラ
- ◇ シテ・ステ・ガラシテ
- テ・デ
- ノデ
- ▲ ガンデ
- ▲ モンダカラ・モンデ
- ▼ ハズ(ニ)
- ▽ ユエ(ニ)
- ニ
- × バ
- × タメ(ニ)・タイニ
- ▽ コツタラ
- ▲ ンガ

図2 ①「それ故に (それだから)」, ②「だから」

図 2-①も、図 1-①「あるから」とほぼ同様、日本海側北部のホドニ類を囲むようにサカイニ類、南東北の太平洋側を中心にカラ類が分布している。両者の接触地帯に、日本海側ではハゲ、太平洋側ではシテ・ステなどの混淆形が分布している点でも図 1-①と同様である。以上については 4.1.1 で述べた。

以下、図 1-①との相違点である。図 2-①は、全体に語形が豊富で記号が混み合っており、秋田県・山形県での併用回答が多い。図 2-①の「それ故に（それだから）」は接続詞相当の形式であり、図 1-①「あるから」のように生産的に用いられる接続助詞よりも個別的で、バリエーションが豊富であると考えられる。

さて、図 2-①では、ホドニ類は図 1-①より種類が多く、分布範囲も若干広い。ハデ・ハンテは岩手県内陸中央部・秋田県全域、エンテガラ・ンテガラは秋田県で回答が多く、宮城県・山形県・福島県にも点在している。アンテ・エンテ・エデは、図 1-①では岩手県の沿岸に 1 地点だったが図 2-①では複数地点あり、スタ・シテが下北半島のみ分布にとどまっている点で、『方言文法全国地図』に近い。また、ホドニ類の元の形に近いとみられるホデが 1 地点、山形県東置賜郡漆山村（現在の南陽市内）にある。

サカイニ類の分布は図 1-①とほぼ同範囲だが、青森県・岩手県の県境付近ではやや少なく、山形県では図 1-①で大半を占めていたサケア他、ハゲア、サケデなどが多い。サカイニ類の元の語形と考えられるサカイニは、山形県内陸（北村山郡富本村：現在の村山市内、常盤村：現在の尾花沢市内、東田川郡広瀬村：現在の羽黒町内、西村山郡大井沢村：現在の西川町内）、青森県（上北郡七戸村）、岩手県（九戸郡山根村：現在の久慈市内、野田村）にある。青森県・岩手県のこの付近には、スカイニ・シカイニもあり、図 1-①とほぼ同様、サカイニ類の盛んな地域の中に点在している。

その他、岩手県沿岸部にケアニ・キャニ、山形県の村山地方南部・置賜地方にカラシテ・カラッテ・ガラテが回答されているのは図 1-①とほぼ同様だが、若干地点が多い。また、タメニが秋田県鹿角地方などに比較的まとまって分布し、岩手県・宮城県の旧伊達藩地域にも点在する。また、秋田県牡鹿半島にガンデ、宮城県南部・山形県置賜地方・福島県にコッタラ、岩手県・宮城県の県境付近にユエニ、南東北太平洋側にはテ・デが点在している。バは 1 地点、山形県飽海郡南平田村（現在の平田町内）に「ソレダバ」があるが、「それ故に」に相当する形式であるかどうか、不明である。

4.2.2 「だから」（図 2-②『方言文法全国地図』第 35 図）

図 1-②「降っているから」とほぼ同様の分布だが、当該の図 2-②「だから」ではホドニ類、サカイニ類、カラ類の 3 種類の単純な分布になっており、その他の語形がほとんどみられない。

また、図 2-①「それ故に（それだから）」にあった青森県・岩手県の県境付近のシカイニ（二）が 1 地点に減少し、同地域と山形県内陸にサカイニ、青森県上北・三戸地方から岩

手県沿岸部にケァー (ニ)・キヤー (ニ), 秋田県鹿角地方・岩手県南部・宮城県北部にタ
 メニの類, 男鹿半島にガンデ, 秋田県中南部・山形県村山地方と置賜地方にカラシテ・カ
 ラッテ・ガラテなどがあるが, 図 2-②にはない。

4.3 小林好日(1944, 1950)の記述との対照

原因・理由表現の調査項目については, 小林好日(1944)『東北の方言』(pp. 27-30,
 pp. 156-159), 同(1950)『方言語彙学的研究』(pp. 223-321)に記述があり, 後者の巻末に
 は, 図 3 のように, サカイニ系統の語形の分布を示したクロス表が掲載されている。回収
 された全ての調査票における当該項目の全回答語形を網羅する表ではないようだが, サカ
 イニ類が回答された県・市郡の調査票の一部が語形ごとに集計されている。

ス ッ ケ ケ	ス キ ヤ ア	ス カ ケ ア	ス ケ ケ エ	シ ケ ア ケ	シ ケ ケ ア	シ ケ ケ エ	シ カ カ エ	ス ツ カ イ ニ	ス カ カ イ ニ	シ ケ ア ア ニ	シ ケ ケ エ ニ	シ カ エ ニ	サ ギ ヤ ア	サ ガ ガ エ	サ カ カ イ ニ	サ カ カ イ ニ	ゲ テ ア	ゲ テ ア	ハ カ エ テ	ハ ゲ ケ テ	ハ ゲ ケ ア	ハ ゲ ケ エ	ハ ゲ ケ エ	ハ ゲ ケ エ	サ ケ ケ テ	シ ケ ケ デ	サ ケ ケ エ	サ ケ ケ エ				
					1	1																									郡北下	
1		2		2	1	12	6																								郡北上	
		4	2			8	2	1																							郡戸三	
						1																									市戸八	
1		5	1			4	2			1	3		2	1																	郡伊閉下	
						1																									市古宮	
	1	1	1			2		2				1	1	1	3																郡戸九	
					1	1																									郡戸二	
			1							1																					郡手岩	
																															郡山村南	
																	2	1	3						4	1	2				郡山村東	
															1		1		7					8	4	5	1				郡山村西	
															1		1		7					15	4	8					郡山村北	
																	1	1	2						14	4	7					市形山
															1																郡川田東	
1																									2	8		13	1		郡川田西	
																									1	4		1	8	1		郡海飽
																										1	12		11	3		市岡鶴
1																									2	4					市田酒	
																										2		3				郡上最
																	1	1	1						4	1	7	1				郡利由
																		1														郡利由

図 3 小林好日(1950)巻末の表

著書の本文を詳しく見ると, 小林好日(1950)には, 図 1-①の解答例に相当する「ウント、
 アルダス、ケル」(p. 227)と, 図 2-①の解答例に相当する「ソレダセーデ」「ソダダス」「ン
 ダエンテ」「ンダエテ」「ンダシャンラ」「アルエンテ」(pp. 227-228)が引用されているほ
 か, 小林好日(1944)には次の語形が記載されている。

ハデ系：ハデ, ハンテ, ヘデ, エンテ (pp. 157-158)

サカイ系：サカイ, サカイニ, シケア, シケアニ, スカー, スケー, スケァー, シケ,
 スケ, サガエ, サカエデ, サゲー, サゲデ, スケ, ゲテ, ゲア, ゲ (pp. 158)

これらの記述では「あるから」「それ故に（それだから）」の2つを区別せず、文献の用例と照らし合わせて考察が行われている。同様に、小林好日(1950)のクロス表においても回答の集計方法は不明であり、今後の精査が必要である。

小林好日(1944, 1950)の本文をまとめると(1)～(4)のようになり、表からは(5)～(7)が読み取れる。

- (1) サカイニの崩れたものに、サカエ、シケイ、スカイ、サケ、セーデ、ダシなどがあり、青森県、山形県、岩手県などに分布する
- (2) 岩手県紫波郡などのセーデは、『御国通辞』に盛岡で「かうしたさかいで」とあることから、サカイデが著しく崩れたものであると思われる
- (3) ホドニの崩れたものに、ホデ、ハデ・ハンテ、ヘデ、エンテ・エテ、ンテ、ンダンテなどがあり、秋田県、岩手県、青森県津軽領、山形県などに分布する
- (4) 山形県にハケ、ハゲア、ハゲアン、ハンゲ、ハケテが行われるが、この地方はサカエが主であるから、この類はハデとサケなどとの混淆によるものと考えられる
- (5) 表から、サケエ・サケ、ハゲ・ハゲエ、サケデ・シケデ・ハゲテ、ゲテなどが、山形県村山地方（北村山郡・西村山郡・東村山郡・南村山郡・山形市）・庄内地方（東田川郡・西田川郡・飽海郡・鶴岡市・酒田市）・最上郡、秋田県由利郡に分布していることがわかる
- (6) 表から、スケア・スケを中心に、サカイニ・シカエニ・スカイニ、サカイ・シカイ・スカイなどが、青森県太平洋側（上北郡・下北郡・三戸郡・八戸市）、岩手県中北部（九戸郡・二戸郡・岩手郡・宮古市・下閉伊郡）の旧南部藩地域に分布していることがわかる
- (7) 表から、サカエ・スケは少数だが、青森県・岩手県の旧南部藩地域と、山形県庄内地方の両方の地域で回答されていることがわかる

これら(1)～(7)はサカイニ類とホドニ類のみについて述べられており、カラ類やタメニなどその他の語形に関する記述はない。その上で図1-①、図2-①の分布図と比較すると、次に述べるセーデを除き、大きく食い違う点はないと思われる。

セーデは、青森県上北・三戸地方から岩手県北部に分布があり、秋田県に数地点がある。セーデの出自については2とおりの考え方があろう。1つは、ホドニ類から生じたヘーデなどからの変化である。ヘーデは主に秋田県に分布しており、青森県のセーデ分布域の周辺にも数地点が点在する。秋田県にヘーデ、太平洋側にセーデが分布する様子から、ホドニ類から変化した語形が日本海側と太平洋側で相補分布をなしていると考えられる。これに基づき、本稿の地図化では、ホドニ類の記号である菱形を与えた。

もう1つはサカイデ>サケアデ>セアデ>セーデなどのように推定される変化で、先の

(2)にまとめた記述を引用すると次のようにある（小林好日(1950)pp. 226-227）

この外に岩手縣九戸郡に、

ソレダセーデ

と云ふのが見える。これは「何ノセーデ」と云ふのと似てゐるが、其れとは用法接續がちがふ。

今日盛岡には「さかひに」の形を明かに示す語は全く見えないが、盛岡方言集服部武喬の「御國通辭」（寛政六年）に盛岡方言と江戸語とを對照して、

そふしたから（江戸） かうしたさかいで（盛岡）

とあるのは、當時盛岡でもつばら「さかひで」を用ひてゐたことを示して居り、その傳つて崩れた形がかのセーデであると思つて間違なからう。

図 1-①・図 2-①においてサカイデを元の形とする可能性がある語形には、サケテ・サゲテ・サゲデ、シケデ、ハアゲテ・ハケテ・ハゲテがあるが、これらが回答された 48 地点のうち 45 地点が山形県内陸で、残る 3 地点は、図 2-①の青森県三戸郡倉石村（現在の五戸町内）、岩手県紫波郡水分村（現在の紫波町内）、秋田県山本郡浅内村（現在の能代市内）のみである。これらの 3 地点は、確かにセーデの分布を取り囲んでいるようでもある。仮にセーデをサカイデの変形とし、サカイニ類とあわせてまとめるとすれば、この地域一帯がサカイニ類の大きな分布域となるので、4.1.1 で述べた混淆形シテ・ステの成立の説明にも都合がよいようにも思われる。しかし、次のような問題がある。セーデの分布域には、サカイニを元の形とするシカイニ・スカイニ、シカア・スカアなどが分布している。このことから、セーデがサカイデを元の形とするならば、この地域ではシカイデ・スカイデ、シカデ・スカデなどの形になる可能性があると思われるが、みあたらない。したがって現段階では、セーデをヘーデなどからの変形と考え、ホドニ類としておく。

5. まとめと今後の課題

以上、本稿では「東北方言通信調査資料」の原因・理由表現形式を地図化し、小林好日(1944, 1950)の記述および『方言文法全国地図』と比較しながら考察を行った。結果として、大きくは次の 2 点が明らかになった。

- (1) セーデを除くサカイニ類とホドニ類の 2 大分布勢力については、小林好日(1944, 1950)の記述内容とほぼ同様の解釈が可能と思われる
- (2) 1940(昭和 15)年頃と 1980(昭和 55)年頃では、ホドニ類・サカイニ類・カラ類がほぼ同じ地域に分布する点で大きな違いは認められない

(1)について、小林好日氏が分布の解釈に利用したのは方言地図ではなく、調査票の回答数を集計した「統計表」（小林好日(1950)の巻末の表と同様の表）であると考えられる。「統

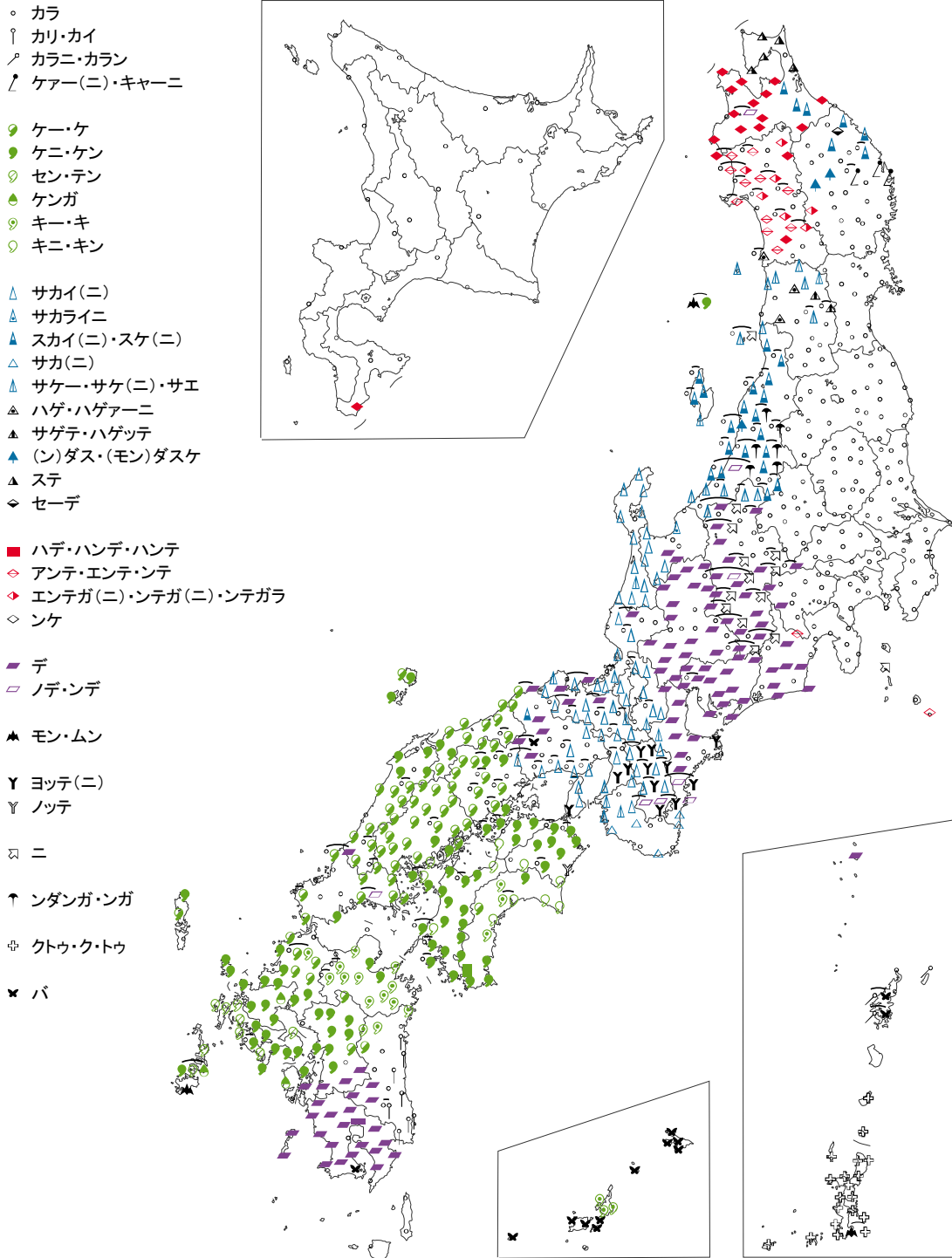
計表」との比較から小林好日氏による分析がどのように行われたかを明らかにする必要があるが、今後の課題としたい。

(2)について、「東北方言通信調査資料」の他項目との違いを述べておく。筆者はかつて「東北方言通信調査資料」の文末表現（可能表現，過去表現など）を地図化し，約40年後に調査された『方言文法全国地図』と比較したことがあるが(竹田晃子(2005.1, 2005.11))，山形県庄内地方・置賜地方や宮城県南部，福島県など南東北において，東北方言に特徴的な形式の分布域が明らかに縮小あるいは消滅し，共通語化するという傾向が確認された。原因・理由表現でも消滅した語形分布はいくつかあるものの，大勢を占めたホドニ類，サカイニ類，カラ類の分布域については文末表現ほどの変化はみられない。句末と文末による言語変化の速度の違いなど，興味深い問題である。各形式の成立などの史的考察とともに今後の課題としたい。

引用文献

- 国立国語研究所(1966)『日本言語地図解説—方法—』，財務省印刷局
国立国語研究所(1989)『方言文法全国地図』第1集，財務省印刷局
国立国語研究所(1989)『方言文法全国地図解説1 付資料一覧』財務省印刷局
小林賢次(1996)『日本語条件表現史の研究』ひつじ書房
小林好日(1944)『東北の方言』三省堂
小林好日(1950)『方言語彙学的研究』岩波書店
竹田晃子(2003)「小林好日氏による東北方言通信調査」『東北文化研究室紀要』第44集，東北大学
竹田晃子(2005.1)「東北方言分布資料の存在と意義」，シンポジウム「方言の記録と保存」配布資料(2005年1月22日開催。東北大学方言研究センター「昭和初期東北方言調査資料のデータベース化」http://www.sal.tohoku.ac.jp/hougen/k_database.htmlに可能表現の図を掲載(2007年2月1日現在))
竹田晃子(2005.11)「東北方言のテンス・アスペクト形式における変容」第81回日本方言研究会研究発表会発表原稿集(2005年11月11日，東北大学)
彦坂佳宣(2005)「原因・理由表現の分布と歴史——『方言文法全国地図』と過去の方言文献との対照から——」『日本語科学』17，国立国語研究所
彦坂佳宣(2006)「特集：地図に見る方言文法 (雨が)降っているから，子供なので (わからなかった)」『月刊言語』35-12，大修館書店
前田直子・日高水穂・小西いずみ・船木礼子(2006)「原因・理由表現」大西拓一郎編『方言文法調査ガイドブック2』科研費報告書

「雨が降っているから行くのはやめろ」『方言文法全国地図』第33図より



※ 小西いずみ氏作成，竹田晃子加工

図4 「(雨が)降っているから(行くのは)やめろ」

「だから言ったじゃないか」 『方言文法全国地図』 第35図より

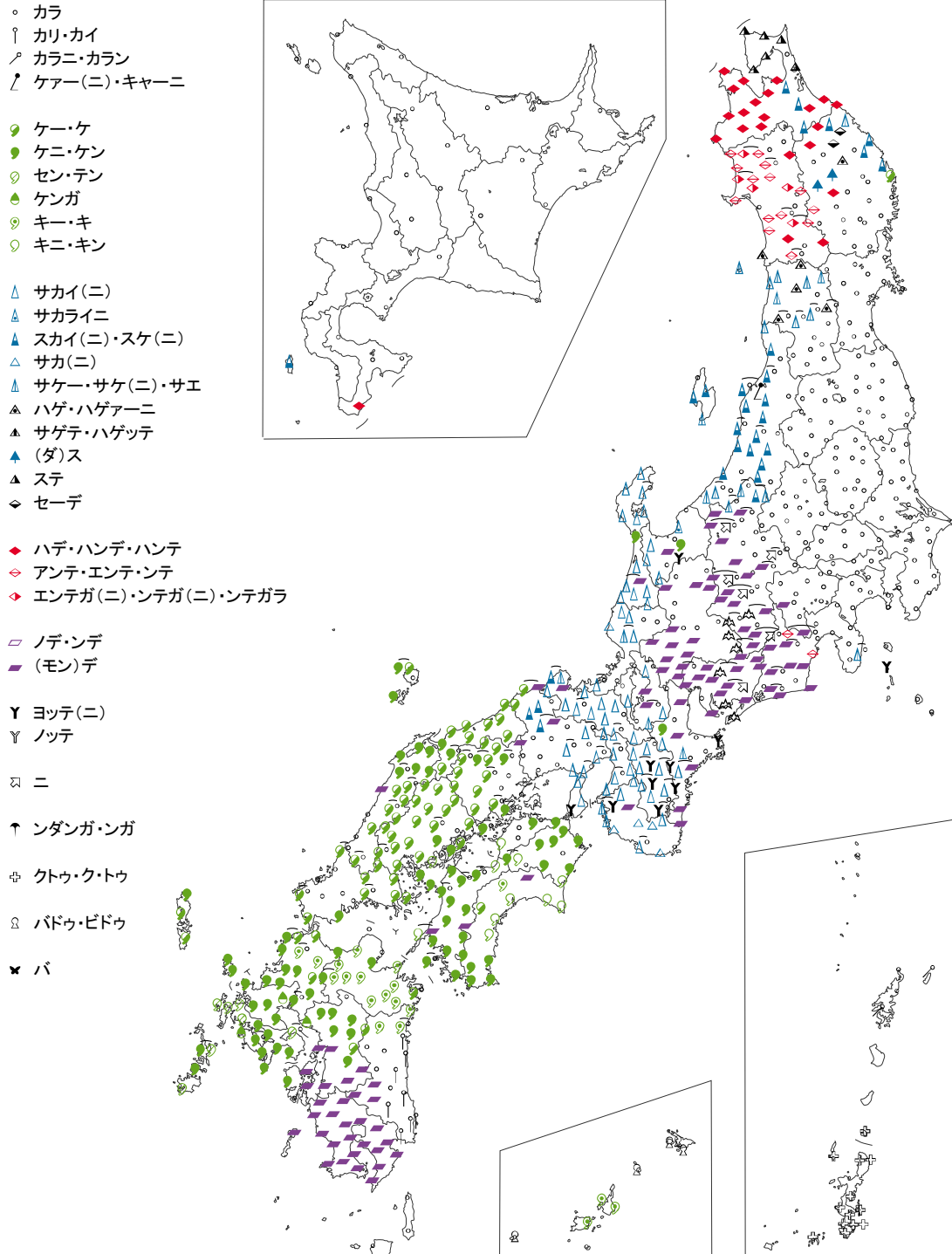


図5 「だから(言ったじゃないか)」

「子どもなのでわからなかった」 『方言文法全国地図』第37図より

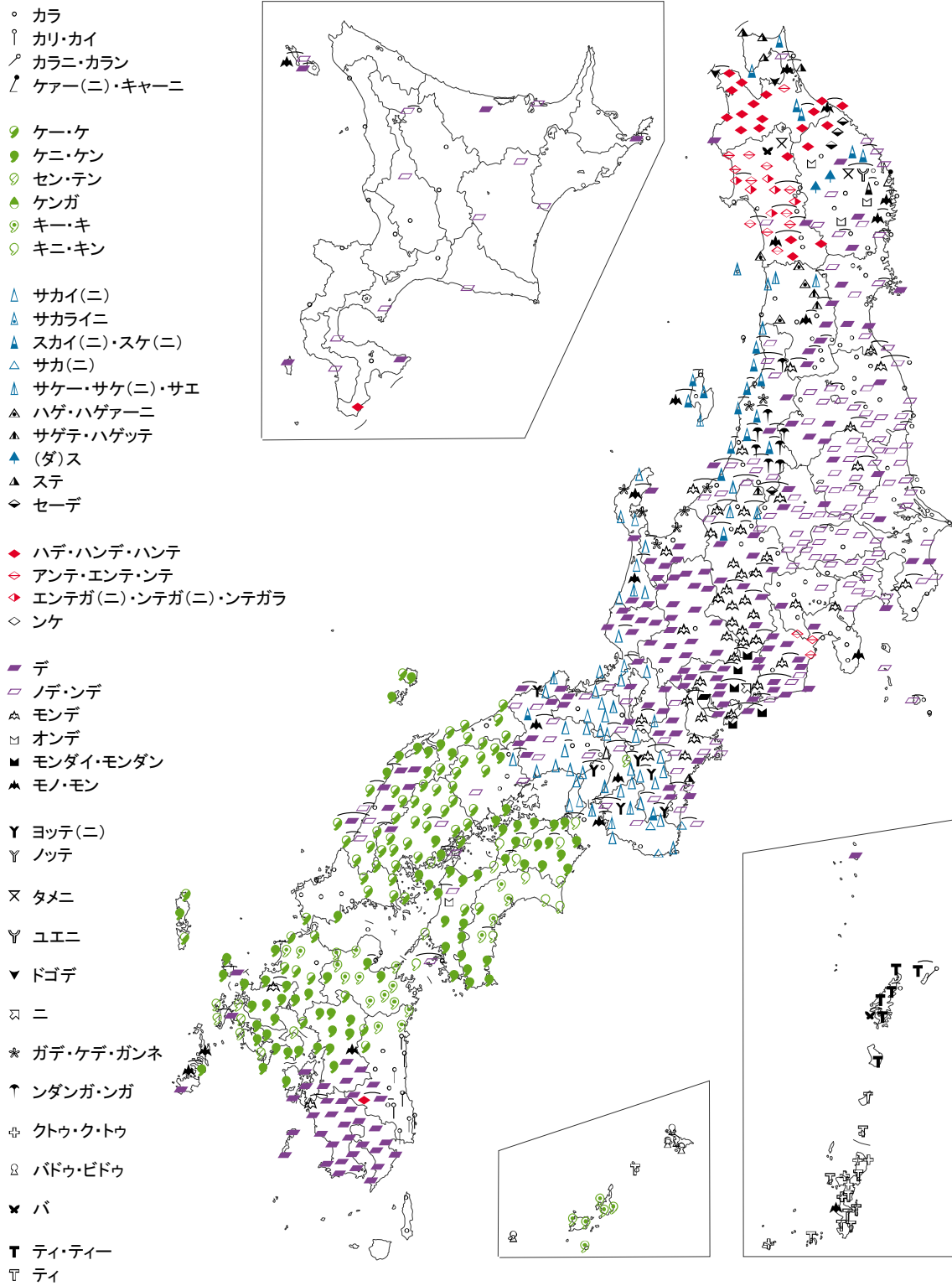
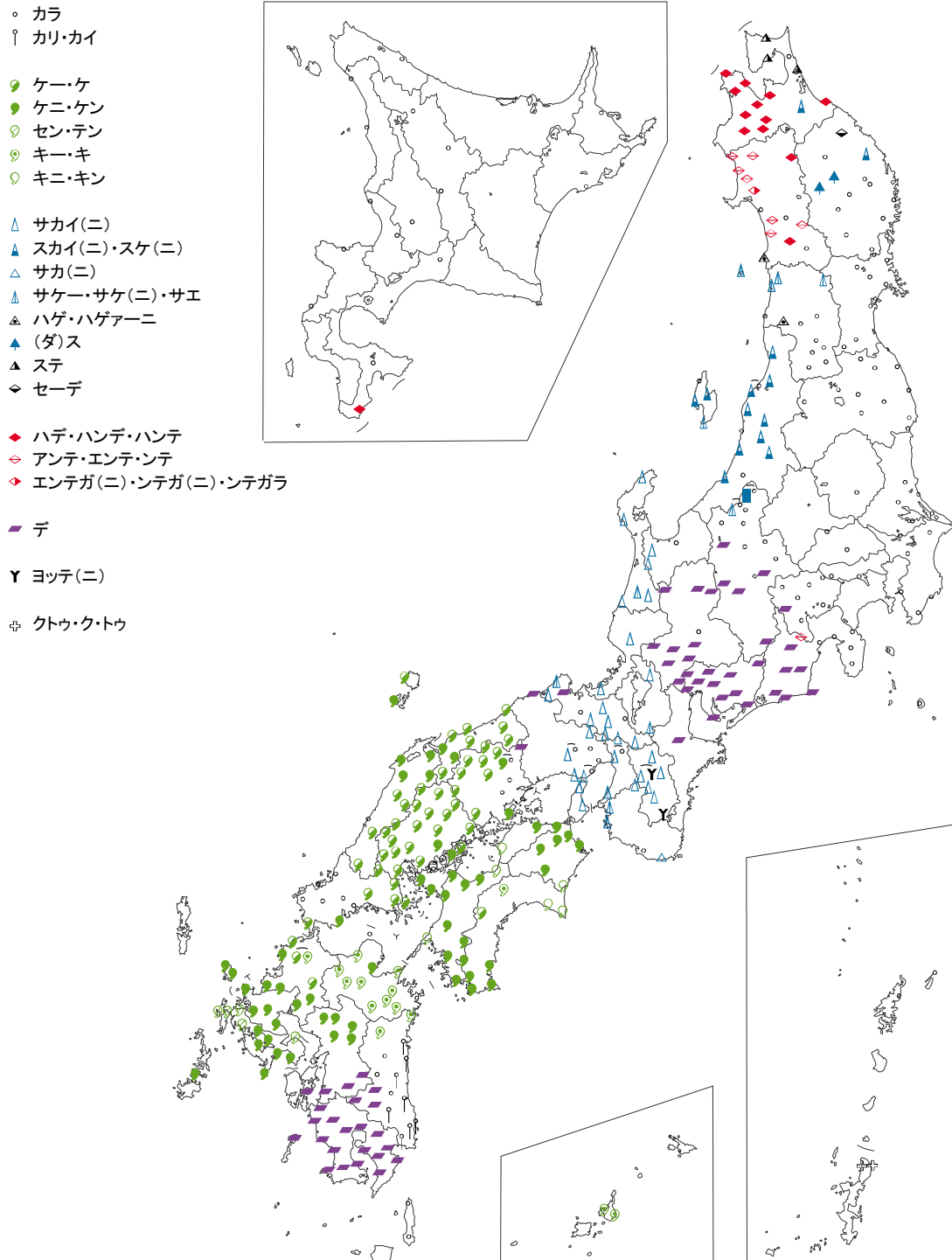


図6 「子どもなので (わからなかった)」

「雨が降っているから行くのはやめろ」『方言文法全国地図』第33図より

「だから言ったじゃないか」『方言文法全国地図』第35図より

「子どもなのでわからなかった」『方言文法全国地図』第37図より



※ 第33図, 第35図, 第37図における同回答を地図化

図7 第33図・第35図・第37図における同語形